

原子カムの構造分析から合意形成論へ(7)

原子力黎明期の京大における総合原子力研究所構想と湯川秀樹

Analysis of the structure of *Genshiryoku-mura* toward a paradigm shift of consensus building (6)

– Integrated Atomic Energy Research Initiative of Kyoto Univ. and Hideki Yukawa at the dawning period–

*澤田 哲生¹, 板東昌子²

¹東京工業大学・先導原子力研究所, NPO あいんしゅたいん

湯川秀樹は、1957年3月29日に原子力委員を辞任した。湯川はそれ以降原子力研究と袂を分かったと巷間信じられているが、それを否定する歴史資料がある。辞任以降も湯川は大学での原子力研究の統合に関与した。

キーワード：原子カムラ、湯川秀樹、京大原子力研究整備委員会、原子核科学、関西原子炉

1. 緒言

1958年12月に京都大学で原子力研究整備委員会が開催された。そこでは、理医工農各学部、化学研究所、工学研究所、基礎物理学研究所を横断する総合原子力研究所の整備計画案が検討された。これは関西研究用原子炉(後に熊取に設置された京大原子炉実験所)とは別の研究組織構想である。その理念・意義と湯川秀樹との関連性について論じる。

2. 方法

研究方法は、湯川史料および関連する文献などの分析と原子力関係者への聞き取り調査である。

3. 京都大学の総合原子力研究所構想

1958年(昭和33年)年12月10日(水)午後1時から『原子力研究整備委員会』が開催された。委員は理医工農各学部長、化学研究所/工学研究所/基礎物理学研究所各所長、およびその他の教授4名である。この4名の中に荒木源太郎(原子核工学科)がいた。また、当時の基礎物理学研究所長は湯川秀樹である。なお、京大原子炉実験所は1956年に計画されている^[1]。『原子力研究整備計画案』には、次の2点が記されている。

1. 最終目標としては総合的な研究所の設置を考える—その規模としては別記のような三部からなる研究所の設置を考える。
2. 差当りの実施方針としてはつぎの方法をとる—適当な時期に化学研究所の原子力関係部分を工学研究所に統合し総合研究所の形式を実現する。統合の時期は諸種の事情を考えに入れ、この委員会で充分研究の上決定する。それまでの間は化研、工研のままでこの整備計画の方針にしたがって設備および施設を整備する。

また、設立の理念には以下のようなくだりがある。

原子核科学についての学部の現状をみると、工学部に於ては原子核工学科が本年度より新設され(中略)原子力を中心とした工学的教育体制が一応整備の方向に向かっている。(中略)

原子核科学についての教育と研究の体制は応用部面のみ充実では真にその目的を達することはできず、基礎科学より応用科学に至る調和ある体制が必要であり、特に広い分野を包含する原子核科学に於いて大学の受持つ重要な責務は基礎的研究と基礎的学科を充分修得した学生の養成にある。

4. 結言

総合原子力研究所は京大の『原子核科学の総合研究所』という位置付けであった。京大の諸学部および諸研究所の共同利用の便に供されるべきものとして大学全体の計画の一環として構想されていたのである。

参考文献

[1] 門上登史夫「実録 関西原子炉物語—熊取に第三の火が灯るまで」(日本輿論社、昭和39年4月)

*Tetsuo Sawada¹, Masako Bando²

¹Tokyo Tech., ²NPO JEIn